Ⅵ. 保育所間及び保護者との情報共有ツール（ホームページ）の開発

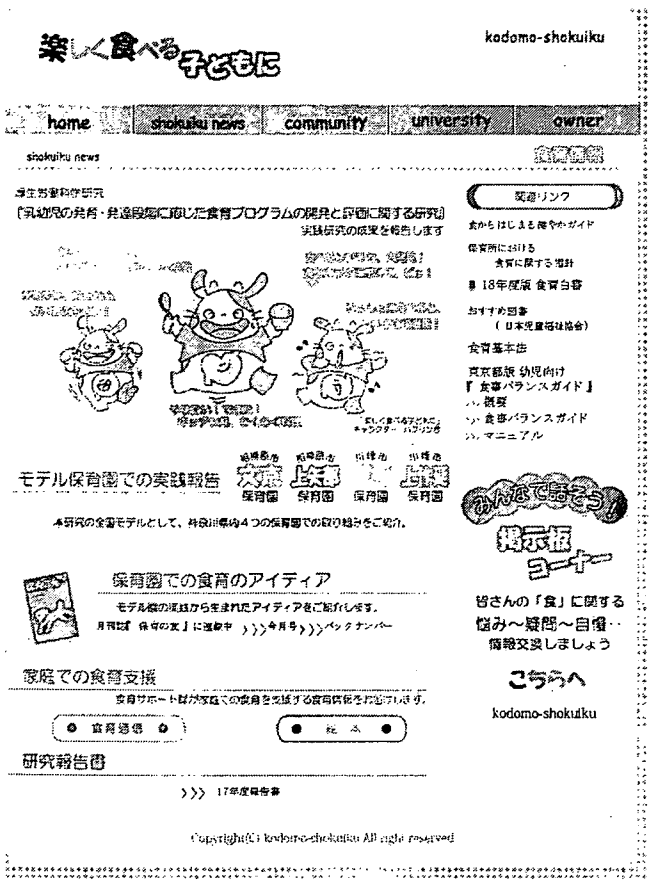
各食育プログラムの実施の計画及び実施のプロセスを保育所間で、また、保護者との情報の共有をするためのツールとして、ホームページ（http://www.kodomo-shokuiku.jp/）を開発し、平成 18 年 9 月から約 1 年半運用した。月に 200 件程度のアクセスがあり、本ホームページが保育所間及び保護者との情報共有ツールとなっていた。

ホームページは主任研究者のホームページの下位に厚生労働科学研究の成果を示すページとして各モデル園での実践報告、保育園での食育のアイディア（前頁　雑誌「保育の友」への掲載ページ）、家庭での食育支援、研究報告を位置づけた。各モデル園での実践報告は、食育の計画や、毎月の食育カレンダー、発達過程別の取り組みの実践状況や評価、保護者に向けて各園で作成した食育だより、園内のクッキングの様子などの掲示物を電子媒体で研究班にメールに送り、研究班で PDF ファイル化をして更新する形式をとった。各園でのホームページに掲載する内容やレイアウトなども園の職員の要望により決定していった。こうした取り組みによって、モデル園では食育カレンダーに掲載する内容やその資料作成について園内カンファレンスを持つ必然性が生じ、職員間で連携が深まっていた。今年度は、いずれの園でもホームページによる保護者や他の保育所に向けた情報発信が、昨年度以上に充実していった。

以下は、ホームページに対する保護者からの感想を一部紹介する。

○「園の様子がわかるので、楽しみにしている」という声が寄せられた。
○「自分の園が掲載されていることが自慢のような気持ちだった」という声が寄せられた。
○「自然に触れて“自分で育てて食べる”当たり前のことのような気もするけれど、今の時代はなかなか体験できないことを園で行っていただきとても感謝しています」という声が寄せられた。
○「スーパーで売っている野菜が畑で育つのだと知る機会があり貴重です。」という声が寄せられた。
○「成長に合わせた園の取り組みがよくわかった」という声が寄せられた。
○「インターネットで我が子が見られると見る意欲がわく」という声が寄せられた。
○ホームページに載せた内容を通して、園での体験が親子の会話につながったり、スーパーに行った時に「これ○○だよ」と答えたり、家庭でも取り入れてみようという気持ちにさせる“きっかけ”になったと思います。

今後も、本ホームページが、子どもの育ちを支えるモデル園での食育のための計画・実践・評価により有効な手段となって運用されるよう更に検討を進めていきたい。



D．考察

1．食育プログラムの内容の特徴

いずれのモデル園でも０～６歳までの園児の発達過程に応じた食育プログラムを開発・実施してきているが、１年目の取り組みから特に重点化した取り組みとして、下記のような特徴がみられた。

第一に、「食」を通して生活をデザインしていくという視点である。「お腹のすくリズムがもてる」ことを目標の基盤として捉え、低年齢では特に、睡眠と食事のバランスによる生活リズムの獲得に主眼が置かれていた。高年齢でも、遊びとの関連を考慮し、昼食、午睡、おやつの時間設定や室内環境を整えていた。「お腹がすいた」「今日は何？」「早く食べたいから、準備しよう」「一緒に食べよう」「たっぷり食べて満足。次に何をして遊ぼうか」と、さまざま意欲を表出していく子どもの姿が浮き彫りになった。

今回の「新保育所保育指針[4]」では、保育所が入所する子どもにとって「最もふさわしい生活の場でなければならない」とされている。これは、「すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない」（児童福祉法第１条第２項）とする児童福祉の理念に基づくものである。長時間にわたる保育の中で、保育所の生活を子どもの福祉を積極的に増進する観点から捉え直す必要性が強調された。そのためには、「子どもがお腹のすくリズムをもつ」ことを食育の核としてとらえ、家庭と園の双方からなる一日の生活を「食」を柱にデザインしていくことをもっと重点化すべきであることが実証された。

第二に、人々が築き、継承してきた様々な食文化に出会うことができるよう、さまざまな取組がなされていた。日常的なケの食事にも、非日常のハレの食事にも、人々が築いてきた食文化、生活文化が背景にあることを、子どもが気づいていくことができるよう、四季折々の環境が用意されていた。行事食のような非日常のハレの食事だけでなく、日常的なケの食事を大切にすること、また、保育者が自分の生活文化も目を向け、季節の恵み、旬を実感し、そうした自然の恵みから食事を仕立ていくこと、また、それらすべての過程での人とのかかわりを大切に捉え、食文化を豊かなものにしようとする大人の食文化観をどうじに育てていくことが重要であろう。食事の場は日常の生活であるがゆえに、新たな取り組みや現状の成果も課題もみつけにくい。今後、各園の取り組みを分かち合い、高めることができるように、他園での取り組みを公表する中で、相互に評価・改善をする機会を多くしていく必要がある。

第三に、保護者に向けて園での「食」がみえる保育空間を提案してきている。今年度は、いずれの園でも食育の取組を公開し、家庭へ情報発信することで、家庭での食育への関心を高めることをねらっていた。子どもの生活を考えれば、保育所のみならず、家庭との連携は不可欠である。たとえば、保護者に向けて、掲示物やお便りなどによる保育所での取り組みの情報発信や、給食献立の展示やレシピの配布、学習会や試食会の実施、園での収穫物の持ち帰り、ホームページの活用などが実施されてきている。戸手保育園では、保護者が午前中の保育活動から参加し、食べる前に一緒にからだを動かしてお腹がすくことから、子ども自身が食卓を整え、仲間と食卓を囲む楽しみを体験できる場を提供してきた。園が食育の視点から、なぜこの活動をすすめているかという保育の意図を体感してもらおうという取組である。上作述保育園でも、父親の調理教室を開くなど保護者との繋がりを重視した取組が始まっている。上矢部保育園では、食育の掲示を通して、「保護者がどんなことで困っているのか」「保護者がどのようなことを求めているのか」「保護者がどのような情報に興味があるのか」に目を向け、園内での動線や、視線を考慮しつつ、情報発信をしている。

また、保護者を食育の受け手だけでなく、発信者として重視し、保護者による食育モニターの募集、試食会での保護者間のディスカッションなど、保護者から保育園への要望や意見を伝える機会、保護者の意向を受け止めることに視点がおかれた。文京保育園では、一年目のベースライン調査で朝食欠食がみられたことから、家庭での朝食を紹介してもらう「とつげき！となりの朝ごはん」といった新たな企画に取り組んできた。家庭にむけて知識情報を提供するだけでなく、小さな家庭での小さな食への工夫を発信するように支援することで、子育てへの自信につなげていくことが目標となっている。同時に、職員自身の朝食を紹介し、保護者と同じ一生活者として同じ目線で食を大切にすることを通して、子どもと、また、保護者とも「食を通した発見や感動を共に分かち合う」ことができていくことを重視していた。

保護者の支援というと子育ての知識や技術を提供することのようであるが、保護者は食に関する一般的な知識ではなく、保育所での日常保育の中で自分の子どもにとって必要な関わり方を体感し、家庭で

の子育て・食事に役立てたいと願っている。子どもが自分自身で食物を作り出して食べていく姿が見えることは、生きることが表に出た園の姿である。園での食育実践を子どもの生活と遊びが分断されることのない、連続した経験として位置付け、子どもたちが実感を伴った学びの世界であることを保護者と共に発見しあっていきたいものである。保護者が自己

第四に、食育を通して、地域に開かれた園づくりが始まっていた。食物の栽培や調理の体験は園内の職員だけではなく、農家や、地場野菜「ふるさとの生活技術指導士」、食品店、食生活推進団体などの地域の人々との交流をもつ可能性を広げることができる場であることを確信できた。地域住民にとっても、保育所で子どもが食にむかう姿は、生きる力を実感できる場である。まさに、保育所が地域の食育ネットワークの一つの拠点となっていくことができることが実証された。

第五に、地域の子育て家庭への支援については、一般的に園庭開放や保育見学など保育所での取り組みに触れる機会や育児相談などが実施されている。しかし、保育所一時保育や地域子育て支援センターが別に設置されているか、併設されているか否かによっても、食育の視点から地域の子育て家庭への支援がどれだけ高まっていくかが異なっていた。

たとえば、地域の子育て家庭の保護者が保育所で食事の介助方法を見学したり、食事を試食したりする体験の場があれば、家庭での援助技術を習得することになっていく。同時に、保育所では、園での保育内容を見直し、点検する場にする機会としていくことができるか、つまり、保育内容を園内で、また、地域の子育て家庭から客観的に評価し合う場としていくことができるかが要となっていくであろう。

2．食育プログラムの開発プロセス

食育プログラムの開発をどのような方法、あるいは手続きによって進めるかという問題は、保育所保育における食育の位置づけや実践内容に影響を与える事柄として看過できないものである。こうした食育プログラムの開発プロセスについて、組織体制、及び想定される開発モデルのあり方の二つの視座から考察してみる。

(1) 食育プログラム開発のための組織体制のあり方

４つのモデル園は、全職員による協力体制づくりを念頭に置きつつも、食育プログラムの開発を担当する組織を設け、取り組みを進めてきた。

そのうち、上矢部保育園は実行委員会制を採用し、０～５歳児までのクラス担当から１名ずつの参加に加え、事務室からも１名担当者を出し、計５名の実行委員体制を組織した。また、戸手保育園と文京保育園は、食育の推進をプロジェクトとして位置づけた上で、取り組むべき内容別にいくつかのチームを組織した。上作延保育園は１年目の栽培収穫を中心とした体制から、「乳児の食育を深めるグループ」「お腹が空くリズムを考えるグループ」「食環境グループ」「保護者へのアピールグループ」と変化させ、基本的に全職員で協議・検討する姿勢を重視した。

このように、モデル園に見られる食育プログラムの開発を担当する組織体制は多様であった。各園が、地域性や園の規模等の特徴を勘案する中で、独自に導いたものであり、各々尊重すべきものであろう。

ただ、クラス等の代表者によって組織される実行委員会は、比較的強固な組織体となる可能性が高い。それに対して、内容別チームの集合体にとどまるケースでは、比較的ゆるやかな組織体となる可能性が高い。さらに、多種の係の一部といった位置づけの場合は、組織としての体をなさない可能性が高い。こうした組織体としての枠組みの強弱、言いかえれば、他の組織体との境界の強度は、開発された食育プログラムに対する職員の受け止め方に異なる影響を与える。強固な組織体によって開発された食育プログラムであれば、権威性も強くなり、他の職員の受けとめは受身的になりがちである。言わば、食育プログラムの提示がトップダウン的になるわけである。これに対して、組織体の枠組みが弱いほど、開発されたプログラムの権威性も弱まり、他の職員も自発的に意見が言いやすくなる。この場合、食育プログラムの提示はボトムアップ的になるわけである。

現在、食育は保育の一環として、全職員の連携の下、園全体で取り組むことが求められている。いわば、「食育をみんなで考え、みんなで実行する」ということである。そのためには、食育プログラムの開発も、

ボトムアップを基本とすることが求められる。園組織の中で、食育プログラムの開発を担当する組織体の枠組みを、どの程度の強度で編成・維持していくのかということは、こうした食育プログラムの性格づけに直結する課題となる。今後は、全職員による協力・連携という理想に向け、食育プログラムの開発を園全体の中でどのような組織を編成して取り組むのかということを熟考する必要がある。園の実情を見据え、適切な方法で組織を編成していくことが求められよう。

(2) 食育プログラムの開発モデルのあり方

一般に、プログラム開発のモデルは、３種類のパターンがあるとされる。第一は目標分析モデル、第二はゴール・フリーモデル、第三は状況分析モデルである[3]。

このうち、目標分析モデルとは、①一般的目標の設定、②特殊目標の設定、③行動的目標への変換、④教材の選択と組織化、⑤教授・学習の実施、⑥行動目標に照らした評価、という６つのプロセスを経て、プログラム開発を進める立場である。これに対して、ゴール・フリーモデルとは、①一般的目標、②創造的教授・学習活動、③記述、④一般的目標に照らした判断・評価、という４つのプロセスを経て、プログラム開発を進める立場である。目標にとらわれない評価を軸にするという点から、ゴール・フリーと呼ばれているわけである。また、状況分析モデルとは、①状況分析、②目標設定、③プログラム計画、④解釈と実行、⑤調整、フィードバック、アセスメント、再構成、の５つのプロセスを経て、プログラム開発を進める立場である。状況の多様性を踏まえてプログラム計画を立案するため、総合的な開発モデルを提示することとなる。

以上の整理を踏まえた時、モデル園の食育プログラムの開発プロセスは、計画作成の段階では目標分析モデルに近いと見なすことができる。なぜなら、モデル園は全て、園の全体的な計画となる保育計画において、包括的な目標を設定した後、具体的な計画となる指導計画、特に長期的な指導計画であるクラス別の年間指導計画において、各クラス固有の目標を設定している。そして年間指導計画をもとに、月案・週日案・活動案等のより具体的な短期的な指導計画を作成する中で、子どもの行動変容を期待する目標と、目標達成のための指導の展開を設定し、実践へとつなげていくことを想定しているからである。

ただ、食育プログラムの実際の展開、つまり実践段階においては、子どもの食に関する問題状況を踏まえ、子どもに経験させたい活動が優先的にされている傾向が強い。多用されている調理体験や栽培活動などはその典型であろう。この場合、目標は活動終了後になされる解釈の結果、後付的な示されることとなる。場合によっては、活動そのものを実施することに比重がかかりすぎ、目標の設定や目標の達成度などへの意識が希薄というケースも見られる。

このようにモデル園では、計画作成の段階では目標分析モデルに近いものの、実践段階になるとゴール・フリーモデル、あるいは状況分析モデルに近いものとなっている。保育は、具体的な経験を通して様々な事柄を学習する時期である乳幼児期の子どもを対象とした営みであるだけに、プログラム開発のモデルも教科的な学習を促すこととなる目標分析モデルよりも、経験学習の促しにつながるゴール・フリーモデル、あるいは状況分析モデルの方が適切と言えよう。今後、食育プログラムの開発プロセスでは、こうした観点が重視されるべきであろう。

なお、計画作成の段階では目標分析モデルだが、実践段階になるとゴール・フリーモデル、あるいは状況分析モデルになるという傾向は、食育プログラムの開発プロセスに統一性がないということも示唆する。そして、この統一性のなさは、計画と実践を遊離させることにもつながる。計画と実践を連動性させるためには、こうした食育プログラムの開発プロセスの統一性も図られねばならないだろう。

３．保育と連動した食育プログラムの創造

モデル園が計画し、実際に取り組んだ食育実践には、一見、食に直結するとは思えない取り組みも見られた。代表的なものをあげれば、遊びであろう。

例えば、乳児組では指先を使った遊びを重視することが食育に関する計画に明記されていた。そして実践においても、ひも通しなどのおもちゃが設定され、楽しい遊びとして継続的に取り組まれていた。これは、指先を使って楽しく遊ぶことが、自分の力で食事を進めることにもつながるとの認識から導かれたも

のである。これ以外にも、幼児組では散歩の途中で季節の変化を感じる体験の重視や、気の合う相手を見つけ、誘い合って遊ぶことなどが食育に関する計画に掲げられていた。

このように、モデル園では食育実践を積み重ねる中、食に直結した活動以外にも「楽しく食べる」ことにつながる活動が存在することを自覚した。前述したように、保育の一環として食育を位置づけ、実践を展開することが求められているが、それをスローガンに終わらせないためには、常に園生活全てを視野に入れた食育プログラムの開発が求められる。モデル園の取り組みは、その好例となるだろう。

ただ、モデル園には食をテーマとした総合的な活動の展開は見られない。幼児組ともなれば、単発的かつ個人的な取り組みだけでなく、子ども自身が目的を設定し、その実現に向け、数日間、仲間と共に活動を継続させていく取り組みもある。こうした取り組みはプロジェクト活動、あるいは組織的な活動などと呼ばれる。また、近年の保育界では、こうした取り組みの中で子どもが体験する質を「協同的な学び」と呼び、重視しようとする動きもある。保育の一環として食育を位置づけるとすれば、こうした活動も視野に入れた食育プログラムの開発を重視すべきである。

今後は、単に「遊びか、しつけか？」、あるいは「遊びか、設定活動か？」といった二者択一的な議論に終始することなく、保育内容を多様な視点から捉えようとする考え方を食育にも援用し、幅広い視点を持ったプログラムを創造していくことが求められる。こうした試みは、結果として食育を保育の一環として位置づけることにもつながるはずである。これが有効に機能すれば、食育は保育と連動させるべきものではなく、すでに融合しているものということにもなるだろう。

E. 結論

４園での独自性をもって２年間に展開された食育プログラムの開発と実施によって、以下のような観点が保育所を拠点とした食育プログラムとして重要な鍵となることが明らかになった。

1）保育所の全職員が子どもの食育について共通理解をもって食育を推進する体制づくりをすすめること
2）保育計画との連動性を持った食育の計画が総合的な視点から立案・実施、評価すること
3）対象児が０歳～６歳と発達が著しい時期であることを考慮し、子どもを観察し、実態を把握する中で、子どもの主体性を重視したカリキュラムを計画・実施すること
4）保育所を拠点とし、食物の生産・流通業者、飲食店等のフードシステムとの連携に着目した地域ベースでの食育ネットワークづくりの視点も重視すること
5）在園児の保護者に対して、園の保育内容である食育の公開・情報発信だけにとどまらず、保護者が子どもの食への知識と援助技術を高め、養育力の向上につながるよう食を通した保護者支援の視点を重視すること
6）「食」を窓口に未就園の地域の子育て家庭への支援を展開することは、保育所での食育の評価改善にもつながること

文　献

1) 酒井治子：平成 17 年度厚生労働科学研究補助金（子ども家庭総合研究事業）報告書「子どもの食育プログラムの開発と評価に関する研究」2006
2) 厚生労働省雇用均等児童家庭局保育課：「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」，2004
3) 山口満，2001，現代カリキュラム研究ー学校におけるカリキュラム開発の課題と方法，学文社，13-17.
4) 厚生労働省：保育所保育指針の改定について（報告書）の公表について，2008

厚生労働科学研究費補助金研究報告書（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

2．食育プログラム実施後における保育所職員の食育に関する認識

分担研究者　　師岡　章　白梅学園短期大学　教授

研究要旨：
食育プログラムの開発とその評価方法の検討を進める４つのモデル園を含めた計６園の保育所職員を対象に、食育プログラム実施後の食育に関する認識の実態を調査した。
その結果、開始時と比較して、食育実践に関する期待度、食育実践の実績と工夫の双方にわたって期待感が高まっていることがわかった。特に、自覚的に食育に取り組んだモデル園職員の認識が、一般園と比較して、総じて認識の高まりを見せていることもわかった。

A．研究目的

平成18年度研究報告書において、食育プログラムの開発とその評価方法の検討を進める４つのモデル園を含めた計６園の保育所職員を対象に、食育プログラム開始時の食育に関する認識の実態を調査した。

その結果、食育実践に関する期待度は、職員連携、保育への連動性ともに、高い期待感、あるいは意欲を持って臨もうとしていることがわかった。ただ、職員連携よりも、食育の計画や評価を保育と連動させることの方に、やや不安を感じる職員が多いこともわかった。特に、評価に関してその傾向が強かった。また、食育実践の実績は栄養・食品中心のアプローチが強かったことなどがわかった。そして、計画・評価ともに具体的な方法が見出しきれていないこともわかった。

そこで本分担研究は、食育プログラム開始時に見られた４つのモデル園を含めた計６園の保育所職員の食育に対する認識が、食育プログラムの実施後にどのように変化したのかを把握することを目的とする。特に、モデル園として園全体で自覚的に食育に取り組む保育所の職員と、一般の園の保育所職員との間に差異が見られるか否かを検討する。本研究の主題である、食を通じた子どもの健全育成のための、乳幼児とその保護者に向けた食育プログラムの開発とその評価方法を解明する上で、その担い手となる保育所職員の食育に対する認識は見逃せない課題となる。本分担研究は、こうした食育プログラムの開発とその評価方法を解明するための、基礎的な情報、実態把握を担うものといえよう。

B．研究方法

1. 対象及び実施方法

前回調査同様、本研究において、食育プログラムの開発とその評価方法の検討を依頼する４つのモデル園と、同園が位置する自治体から各１園ずつを抽出し、アンケート（フェイスシート１部、質問紙３部）を配布し、各園の職員に回答してもらった上で、郵送にて回収した。アンケート実施時期は、平成19年２月であった。表１に示す通り、106人からアンケートが返信された。回収率は86.9%であった。

表1　回収率

園名	職員数	回答数	
		実数	%
全　体	122	106	86.9%
*相模原市立上矢部保育園	20	18	90.0%
*相模原市立文京保育園	26	22	84.6%
相模原市立陽光台保育園	19	16	84.2%
*川崎市立上作延保育園	25	22	88.0%
*川崎市立戸手保育園	21	19	90.5%
川崎市立末長保育園	11	9	81.8%

*印がモデル園である

2．アンケートの内容と分析の方法

アンケートを作成するにあたり、食育プログラム開始時同様、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』を参考とした。『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』では、食育を保育の一環として推進することを前提に、「食育の計画」を「保育の計画」と連動させることや、計画－実践－評価といった保育する側の保育活動が循環的に機能することを求めている。また、それらの取り組みを保育所全職員が連携する中で展開することも求めている。そこで、こうした点に関する認識について、選択方式と自由記述方式を組み合わせるかたちでアンケートを作成した。

アンケート用紙は、＜フェイスシート＞及び＜食育実践に関する質問紙＞からなる。まず、回答者の属性を＜フェイスシート＞に記入してもらった。そして、平成19年度の2月時点で認識していた食育に関する事項については、＜食育実践に関する質問紙＞に回答してもらった。以下、概略を説明するが、アンケートの具体的な内容は巻末の資料1を参照してほしい。

＜フェイスシート＞

Ⅰ．施設名、Ⅱ．職種名、Ⅲ．経験年数（経験年数、及び保育士のみ担当のクラス）についてたずね、必要事項を記述してもらった。

＜食育実践に関する質問紙＞

Ⅳとして、まず食育実践に関する期待度について、食育プログラム開始時同様、5段階による単純選択方式で回答してもらった。次に、Ⅴにおいて、食育実践の実績と今後の工夫について、食育プログラム開始時の質問内容を一部実施後の実態に即して変更し、自由記述方式で回答してもらった。以下、各節ごとの質問内容について説明する。

・食育実践に関する期待度について

大別すると、職員連携と保育との連動性に関する期待度の2点をたずねた。

そのうち、職員連携については、(1)食育の計画を策定する上での職員連携の程度、(2)食育実践を展開する上での職員連携の程度、(3)食育の評価を実施する上での職員連携の程度の3項目。保育との連動性については、(4)保育計画に連動した「食育の計画」づくりの可能性、(5)指導計画に連動した「食育の計画」づくりの可能性、(6)保育の評価に連動した「食育の評価」づくりの可能性の3項目をそれぞれたずねた。各項目はどの程度期待できるかについて5段階（1.全くできそうにない～5.かなりできそうだ）で評定してもらった。

・食育実践の実績と今後の工夫について

大別すると、食育に関するイメージと、食に関する実践の実績、今後の食育実践に関する工夫の3点をたずねた。

そのうち、食育のイメージについては、(1)保育所で実施すべき食育の取り組みという1項目のみたずねた。次に、食に関する実践の実績については、(2)今年度の食事時間中の指導・援助の重点、(3)今年度の食事の雰囲気づくりの重点、(4)今年度の食事時間以外の子どもの食を充実させる取り組み、(5)今年度、保育の計画づくりについて重視してきた取り組み、(6)今年度、保育の評価について重視してきた取り組みの5項目。今後の工夫については、(7)保育の計画づくりとして工夫していきたいこと、(8)保育の評価として工夫していきたいことの2項目をそれぞれたずねた。各項目は、考えていることを自由に記述してもらった。

3．分析方法

食育実践に関する期待度については、単純集計を行った。また、自由記述で回答してもらった食育実践の実績と今後の工夫については、各項目別に回答内容にそってカテゴリー化し、その結果を単純集計した。なお、カテゴリー化する上で、記述内容に複数の意味が含まれている場合は、各内容別に分類し、複数カウントした。一人の回答の中に同様の分類内容が複数見られた場合は、一回のみカウントした。

（倫理面への配慮）

本調査の実施に際しては、研究者と保育行政担当者と協議の上、施設長に対し書面にて研究の主旨、方法、施設情報の保護を説明した。また回答は無記名とし、回答内容が施設内外にもれることがないよう、プライバシーの確保に最大限の配慮を行った。

C．研究結果と考察

1．食育実践に関する期待度について

職員連携、及び保育との連動性に関する期待度は表2に示す通りであった。

このうち、職員連携に関しては、「1．食育の計画をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の連携がとれそうだ」については、「か

なりできそうだ」が46.7%、「少しできそうだ」が 41.0%であった。これに対して、「どちらともいえない」は9.5%、「あまりできそうにない」は1.0%、「全くできそうにない」は1.9%であった。

「2．食育の実践をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の連携がとれそうだ」については、「かなりできそうだ」が54.3%、「少しできそうだ」が 34.3%であった。これに対して、「どちらともいえない」は 10.5%、「あまりできそうにない」は1.0%、「全くできそうにない」は0%であった。

「3．食育の評価をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の連携がとれそうだ」については、「かなりできそうだ」が37.5%、「少しできそうだ」が 46.2%であった。これに対して、「どちらともいえない」は 11.5%、「あまりできそうにない」は2.9%、「全くできそうにない」は1.9%であった。

以上の職員連携に関する各項目について、期待の高さを感じさせるであろう「かなりできそうだ」と「少しできそうだ」を合算すると、食育の計画については 87.7%、食育の実践については88.6%、食育の評価については83.7%と、いずれも高い割合を示している。ただ、3項目のうち、開始時同様、食育の評価に関するポイントが最も低いのは、食育の実践や計画に比べ、評価活動に対する困難さ、あるいは、不安を感じている保育所職員が多いことを物語る。

次に、保育との連動性に関しては、「4．保育計画に連動した「食育の計画」づくりをすすめることができそうだ」については、「かなりできそうだ」が 40.2%、「少しできそうだ」が48.0%であった。これに対して、「どちらともいえない」は8.8%、「あまりできそうにない」は1.0%、「全くできそうにない」は2.0%であった。

「5．指導計画に連動した「食育の計画」づくりをすすめることができそうだ」については、「かなりできそうだ」が 35.6%、「少しできそうだ」が 51.5%であった。これに対して、「どちらともいえない」は8.9%、「あまりできそうにない」は2.0%、「全くできそうにない」は2.0%であった。

「6．保育の評価に連動した「食育の評価」づくりをすすめることができそうだ」については、「かなりできそうだ」が 23.2%、「少しできそうだ」が 56.6%であった。これに対して、「どちらともいえない」は 16.2%、「あまりできそうにない」は3.0%、「全くできそうにない」は1.0%であった。

以上の保育との連動性に関する各項目について、期待の高さを感じさせるであろう「かなりできそうだ」と「少しできそうだ」を合算すると、保育計画への連動については 88.2%、指導計画への連動については 87.1%、保育の評価への連動については 79.8%であった。いずれも高い割合を示しているが、職員連携と比較すると、総じて若干ポイントダウンしている。これは、食育プログラム開始時と同様の傾向である。

また、ここでも評価活動に関するポイントが最も低くなっている。前述した職員連携と同様、保育所職員が計画よりも評価活動に困難さを感じていること、また具体的なイメージが不足している傾向を示すと読み取れる。また、計画のうち、指導計画よりも保育計画に「食育の計画」を連動させる方が、若干ポイントが低い。保育計画は、園の全体計画として指導計画に比較して内容的に抽象度の高い計画である。その作成もクラス担任レベルではなく、施設長に作成の責任が委ねられるケースが大半である。そのため、保育所職員においては、指導計画の方が身近に感じることも多く、そうした意識が反映された結果とも読み取れる。

以上を、食育プログラム開始時と比較すると、図1のようになる。

これを見ると、職員連携、及び保育との連動性のいずれにおいても、「かなりできそうだ」と自信を深める職員が増加していることがわかる。ただ、「かなりできそうだ」と「少しできそうだ」を合算すると、食育プログラム実施後は、職員連携への期待感がやや減少しているのに対し、保育との連動性に関する期待感は高まっている。

前述した通り、全体としては食育プログラムの開始時も実施後も、保育との連動性よりも職員連携に関する期待感の方が高い傾向は変わらない。しかし、食育プログラムの実施後に保育との連動性に関する期待感が高まったのは、食育の計画を様々なかたちで作成したことによるだろう。計画書として目に見えるかたちにまとめあげられていく過程は、取り組みを進める職員にとって自信を深める結果になると思われる。

一方、職員連携への期待感がやや減少しているのは、食育の実施を通して異なる職種が話し

合い、共通理解を深めることの困難さを実感した結果であろう。特に、対象とした園は全て公立であり、園長も含めて毎年異動が発生する。人間関係は毎年、白紙に近い状態から構築することが求められる。それに加えて、従来はあまり課題となりにくかった異職種間の連携が、食育の導入によって求められたわけである。いずれの職場でも、人間関係の構築は永遠のテーマである。物事を進めれば進めるほど、その困難さを実感することも世の常である。食育プログラム実施後の結果は、そうした傾向の一端を示したものと理解できる。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園で比較すると、図２のようになる。

これを見ると、「かなりできそうだ」と「少しできそうだ」を合算した期待感の高さは、「１．食育の計画をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の連携がとれそうだ」を除いて、モデル園の方が高いことがわかる。特に、実践に最も身近な「２．食育の実践をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の連携がとれそうだ」と、「５．指導計画に連動した「食育の計画」づくりをすすめることができそうだ」の２項目について、前者はモデル園が 90.1%であるのに対し、一般園は 83.4%。後者はモデル園が 91.0%であるのに対し、一般園は 73.9%と、モデル園の職員の方が高い期待度を示している。

さらに、開始時の調査でも、最も不安が見られた「６．保育の評価に連動した「食育の評価」づくりをすすめることができそうだ」についても、モデル園が 83.1%であるのに対し、一般園は 68.2%にとどまっている。これは、モデル園が独自に取り組んだ子ども一人ひとりの評価票作成が自信につながっていると見られる。

このように、食育プログラムの実施に際し、モデル園として、園全体で自覚的に取り組み、その成果を基本的な計画である保育計画や、具体的な計画である指導計画に関連させながら食育の計画書としてまとめたり、子どもの成長を評価票に記載する営みを続けてきたモデル園の方が、一般園によりも食育に対する職員の期待感、あるいは自信が深まっていることがわかる。

表2 食育プログラム実施後の期待感

	かなりできそうだ		少しできそうだ		どちらともいえない		あまりできそうにない		全くできそうにない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
(1) 食育の計画をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の職員と連携がとれそうだ	49	46.7%	43	41.0%	10	9.5%	1	1.0%	2	1.9%	105	100.0%
(2) 食育の実践をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の職員と連携がとれそうだ	57	54.3%	36	34.3%	11	10.5%	1	1.0%	0	0.0%	105	100.0%
(3) 食育の評価をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の職員と連携がとれそうだ	39	37.5%	48	46.2%	12	11.5%	3	2.9%	2	1.9%	104	100.0%
(4) 保育計画に連動した「食育の計画」づくりをすすめることができそうだ	41	40.2%	49	48.0%	9	8.8%	1	1.0%	2	2.0%	102	100.0%
(5) 指導計画に連動した「食育の計画」づくりをすすめることができそうだ	36	35.6%	52	51.5%	9	8.9%	2	2.0%	2	2.0%	101	100.0%
(6) 保育の評価に連動した「食育の評価」づくりをすすめることができそうだ	23	23.2%	56	56.6%	16	16.2%	3	3.0%	1	1.0%	99	100.0%

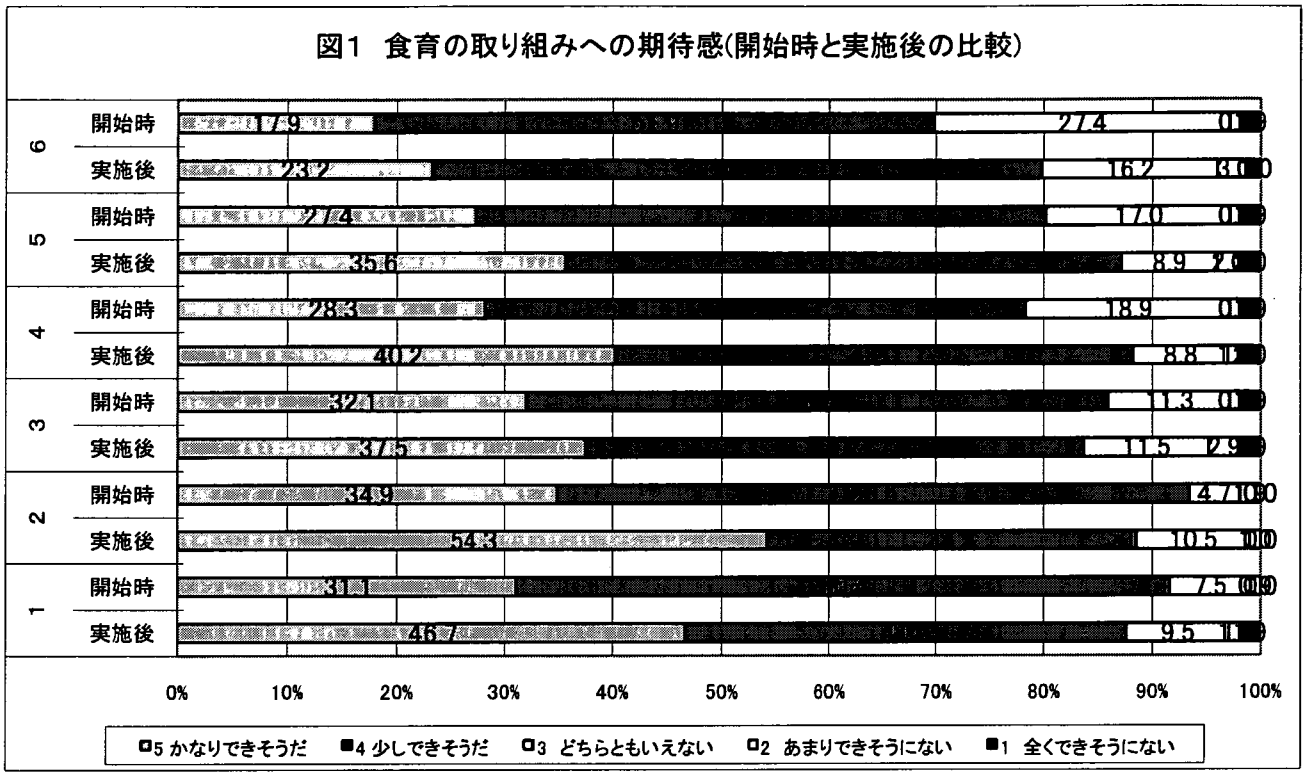


図1 食育の取り組みへの期待感(開始時と実施後の比較)
6
開始時
実施後
5
開始時
実施後
4
開始時
実施後
3
開始時
実施後
2
開始時
実施後
1
開始時
実施後
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
5 かなりできそうだ
4 少しできそうだ
3 どちらともいえない
2 あまりできそうにない
1 全くできそうにない

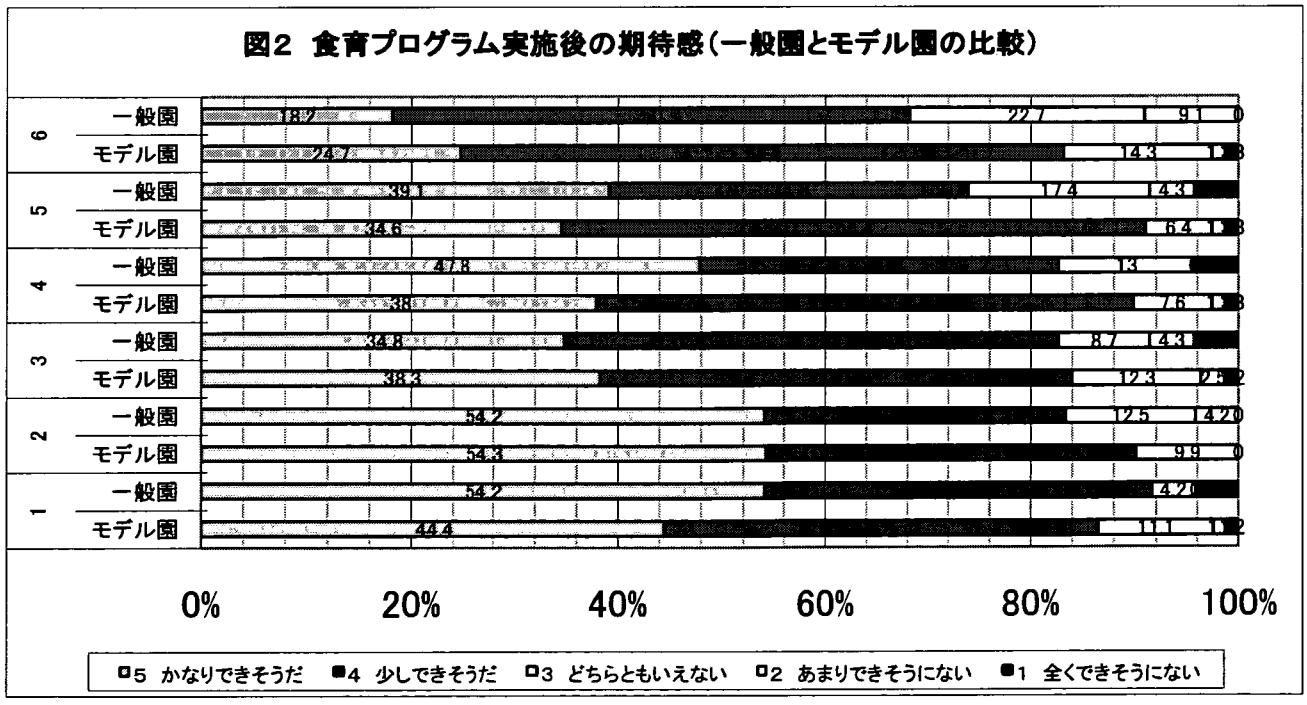


図2 食育プログラム実施後の期待感(一般園とモデル園の比較)
6
一般園
モデル園
5
一般園
モデル園
4
一般園
モデル園
3
一般園
モデル園
2
一般園
モデル園
1
一般園
モデル園
0%
20%
40%
60%
80%
100%
5 かなりできそうだ
4 少しできそうだ
3 どちらともいえない
2 あまりできそうにない
1 全くできそうにない

2．食育実践の実績と今後の工夫について

2-1. 食育のイメージ

「1. 保育所で実施すべき食育として、どのような取り組みを思い浮かべますか？」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は27項目であった。この27項目に対して、336件の回答が得られた。その結果は、表3に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「調理保育」の16.1%であった。次に、「栽培活動」14.9%、「栄養指導・食教育」9.5%、「保護者への啓発・啓蒙」6.8%、「食への関心」6.3%、「遊びの充実」6.3%が続く。この6つの取り組みで全回答数の59.8%を占めた。全体として、食育プログラムの開始時とイメージする事柄に大差はない。ただ、「調理保育」と「栽培活動」の順位が逆転していること。また「遊びの充実」が上位にあがっているなどの変化は見られる。ちなみに、「調理保育」は食事づくり、「栽培活動」は食材生産と、共に「食べる」以前の「つくる」ことにかかわる活動である。子どもの食事が受身化している現在、保育所において子どもが楽しく食べるために、こうした「つくる」活動を重視しようとする傾向は根強く、「調理保育」と「栽培活動」は食育を代表する取り組みとイメージされているようだ。

とはいえ、食育プログラムの実施後、開始時には0.7%に過ぎなかった「遊びの充実」が上位となったことは特筆に値する。一見すると、遊びと食育は結びつきにくいものである。特に、食育を食事に直結した活動の展開とイメージする保育者からすれば、見当外れとも見なされよう。しかし、「遊びが充実し、おなかがすいたと思える保育（保育士31年目）」という回答に象徴されるように、食事を楽しく、そしておいしく食べるためには、子どもが最も主体的に活動する遊びの充実が不可欠である。こうしたイメージの高まりは、食育プログラムの実施を経て、食育の内容を幅広く捉えようとする意識が高まっていることも物語る。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表4・5のようになる。

これを見ると、モデル園が27項目、一般園が16項目と、モデル園の方が食育に関するイメージ内容が広いことがわかる。そして、モデル園では「雰囲気・環境づくり」を始め、「食事準備へのかかわり」「ランチルーム設置」など、モデル園が自覚的に取り組んできたランチルームにかかわる内容が、食育内容の幅を広げていることがわかる。また、少数意見だが「食品流通への気づき」「他園との情報交換」など、子ども、そして大人の双方に対して、意欲的な取り組みをイメージする傾向も見られた

表3 食育のイメージ

		回答内容	
		実数	%
1	調理保育	54	16.1%
2	栽培活動	50	14.9%
3	栄養指導・食教育	32	9.5%
4	保護者への啓発・啓蒙	23	6.8%
5	食への関心	21	6.3%
6	遊びの充実	21	6.3%
7	食事マナー指導	19	5.7%
8	会食・人間関係づくり	17	5.1%
9	雰囲気・環境づくり	16	4.8%
10	食文化・伝統食への関心	12	3.6%
11	充実した食事の提供	11	3.3%
12	保健・健康指導	7	2.1%
13	食事準備へのかかわり	7	2.1%
14	ランチルーム設置	6	1.8%
15	保育との連動	6	1.8%
16	職員連携	5	1.5%
17	保護者との連携	5	1.5%
18	生活習慣・リズムの形成	5	1.5%
19	感謝・心の育ち	4	1.2%
20	飼育活動	3	0.9%
21	偏食指導	2	0.6%
22	バイキング給食	2	0.6%
23	五感・味覚形成	2	0.6%
24	自主性・主体性の育成	2	0.6%
25	絵画・製作活動	2	0.6%
26	食品流通への気づき	1	0.3%
27	他園との情報交換	1	0.3%
		336	100.0%

表4 食育のイメージ(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	調理保育	43	15.6%
2	栽培活動	39	14.1%
3	栄養指導・食教育	22	8.0%
4	保護者への啓発・啓蒙	20	7.2%
6	遊びの充実	19	6.9%
5	食への関心	17	6.2%
7	食事マナー指導	17	6.2%
9	雰囲気・環境づくり	16	5.8%
8	会食・人間関係づくり	15	5.4%
10	食文化・伝統食への関心	8	2.9%
11	充実した食事の提供	8	2.9%
13	食事準備へのかかわり	7	2.5%
12	保健・健康指導	6	2.2%
14	ランチルーム設置	6	2.2%
16	職員連携	5	1.8%
18	生活習慣・リズムの形成	5	1.8%
17	保護者との連携	4	1.4%
15	保育との連動	4	1.4%
19	感謝・心の育ち	3	1.1%
21	偏食指導	2	0.7%
23	五感・味覚形成	2	0.7%
24	自主性・主体性の育成	2	0.7%
25	絵画・製作活動	2	0.7%
22	バイキング給食	1	0.4%
20	飼育活動	1	0.4%
26	食品流通への気づき	1	0.4%
27	他園との情報交換	1	0.4%
		276	100.0%

表5 食育のイメージ(一般園)

		回答内容	
		実数	%
1	調理保育	11	18.3%
2	栽培活動	11	18.3%
3	栄養指導・食教育	10	16.7%
4	食への関心	4	6.7%
5	食文化・伝統食への関心	4	6.7%
6	保護者への啓発・啓蒙	3	5.0%
7	充実した食事の提供	3	5.0%
8	遊びの充実	2	3.3%
9	食事マナー指導	2	3.3%
10	会食・人間関係づくり	2	3.3%
11	保育との連動	2	3.3%
12	飼育活動	2	3.3%
13	保健・健康指導	1	1.7%
14	保護者との連携	1	1.7%
15	感謝・心の育ち	1	1.7%
16	バイキング給食	1	1.7%
		60	100.0%

2-2. 食事時間中の実践の実績

「2. 今年度、食事時間中の指導・援助として、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は25項目であった。この25項目に対して、286件の回答が得られた。その結果は、表6に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「食事マナー指導」の27.3%であった。次に「楽しく・意欲的に食べる」9.4%、「雰囲気・環境づくり」9.1%、「偏食指導」6.6%、「個人差・発達差の考慮」6.6%が続く。以上の5つの取り組みで全回答数の59.0%を占めた。

1位の「食事マナー指導」は開始時と同じだが、前回11.7%で2位であった「偏食指導」、同5.7%で5位であった「励ましの言葉かけ」など、しつけの重視、あるいは気になる姿を是正する取り組みが減少した。代わって「楽しく・意欲的に食べる」、「雰囲気・環境づくり」、「個人差・発達差の考慮」といった子どものプラス面を引き出す、あるいは伸ばす取り組みが上位となった。

食育プログラムを実施する中、保育において大切にされてきた子ども主体の実践の展開が浸透しつつある結果であろう。「食べることの喜びが感じられるよう個々にあわせ援助してきた。苦手なものは無理に進めるのではなく“いらない”“たべれない”と意思表示できるよう指導。子どもが食べてみようとする気持ちを引き出せるような言葉かけをしてきた。“おいしい”み

んなで（友だち）と一緒に食べる喜びを大切にしてきた（保育士31年目）」という回答に象徴されるように、食事時間中の風景、また保育者と子どもの関係も良好なものに変化しつつあるといえよう。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表7・8のようになる。

これを見ると、モデル園が25項目、一般園が17項目と、モデル園の方が食事時間中の実践の幅が広いことがわかる。双方、1位が「食事マナー指導」であることは変わりないが、モデル園では続いて「楽しく・意欲的に食べる」「雰囲気・環境づくり」「個人差・発達差の考慮」となるのに対し、一般園では「栄養指導」「雰囲気・環境づくり」「偏食指導」と続く。モデル園の方が、より子ども主体の実践を展開しようと心がけていることが伺われる。

また、モデル園には「会食・人間関係づくり」「（大人が）一緒に食べ、手本となる」「異年齢交流」など、他者とのかかわりを自覚的に実践する傾向も見られた。他者とのかかわりは、食事そのものを楽しいものにすることはもちろん、他者の姿を見てまねる（学ぶ）という面も含まれている。食事中、幼い子どもにしつけたい事柄は多々あるが、それを保育者からの指示命令といった直接的なアプローチだけで進めることなく、他者とのかかわりを通した観察学習も活用しようということだろう。モデル園ならではの視点の深まりを示すものといえよう。

表7 食事時間中の実践実績

		回答内容	
		実数	%
1	食事マナー指導	78	27.3%
2	楽しく・意欲的に食べる	27	9.4%
3	雰囲気・環境づくり	26	9.1%
4	偏食指導	19	6.6%
5	個人差・発達差の考慮	19	6.6%
6	栄養指導	13	4.5%
7	食事量の調節	11	3.8%
8	会食・人間関係づくり	11	3.8%
9	食への関心	9	3.1%
10	食事時間の遵守	9	3.1%
11	保健・健康指導	9	3.1%
12	一緒に食べ、手本となる	8	2.8%
13	励ましの言葉かけ	7	2.4%
14	咀嚼の促し	7	2.4%
15	調理の工夫	4	1.4%
16	生活リズムの形成	4	1.4%
17	バイキング給食	4	1.4%
18	職員連携	3	1.0%
19	味覚教育	3	1.0%
20	調理活動導入	3	1.0%
21	栽培との連動	3	1.0%
22	当番活動	3	1.0%
23	完食の促し	2	0.7%
24	感謝・心の育ち	2	0.7%
25	異年齢交流	2	0.7%
		286	100.0%

表8 食事時間中の実践実績(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	食事マナー指導	61	26.0%
2	楽しく・意欲的に食べる	24	10.2%
3	雰囲気・環境づくり	22	9.4%
4	個人差・発達差の考慮	18	7.7%
5	偏食指導	16	6.8%
6	会食・人間関係づくり	11	4.7%
7	食事量の調節	9	3.8%
8	一緒に食べ、手本となる	8	3.4%
9	食事時間の遵守	8	3.4%
10	保健・健康指導	8	3.4%
11	栄養指導	7	3.0%
12	励ましの言葉かけ	6	2.6%
13	食への関心	6	2.6%
14	咀嚼の促し	5	2.1%
15	職員連携	3	1.3%
16	調理の工夫	3	1.3%
17	味覚教育	3	1.3%
18	当番活動	3	1.3%
19	生活リズムの形成	3	1.3%
20	完食の促し	2	0.9%
21	感謝・心の育ち	2	0.9%
22	異年齢交流	2	0.9%
23	栽培との連動	2	0.9%
24	バイキング給食	2	0.9%
25	調理活動導入	1	0.4%
		235	100.0%

表9 食事時間中の実践実績(一般園)

		回答内容	
		実数	%
1	食事マナー指導	17	33.3%
2	栄養指導	6	11.8%
3	雰囲気・環境づくり	4	7.8%
4	偏食指導	3	5.9%
5	楽しく・意欲的に食べる	3	5.9%
6	食への関心	3	5.9%
7	食事量の調節	2	3.9%
8	咀嚼の促し	2	3.9%
9	調理活動導入	2	3.9%
10	バイキング給食	2	3.9%
11	励ましの言葉かけ	1	2.0%
12	個人差・発達差の考慮	1	2.0%
13	食事時間の遵守	1	2.0%
14	調理の工夫	1	2.0%
15	栽培との連動	1	2.0%
16	保健・健康指導	1	2.0%
17	生活リズムの形成	1	2.0%
		51	100.0%

2-3. 食事環境づくりの実績

「3. 今年度、食事の雰囲気づくりに関して、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は28項目であった。この28項目に対して、260件の回答が得られた。その結果は、表10に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「笑顔で会話・楽しい雰囲気」と「花を飾る」で10.8%、であった。次いで「静かで落ち着いた雰囲気」10.4%、「ＢＧＭ」9.2%、「美化装飾」8.8%が続く。以上の５つの取り組みで全回答数の50.0%を占めるにとどまった。

食育プログラムの開始時は、「笑顔で会話・楽しい雰囲気」と「静かで落ち着いた雰囲気」が、やや突出したかたちで1位と2位を占めていた。ここには、賑わいだ食事空間を重視し、子どもたちがもりもりと活気づいて食べる風景を是とするのか、静寂な食事空間を重視し、落ち着いた雰囲気の中で食事を摂る風景を是とするのかといった、しばしば対立がちな価値観が如実に表れていた。しかし、食育プログラムの実施後は、価値観レベルのものと、「花を飾る」や「ＢＧＭ」「美化装飾」といった具体的な環境づくりとの間に大きな差はなくなっている。「楽しく、そして安心感の中で食べられるように、音楽をかけたり（大音量ではなく、会話をしても邪魔にならない程度の）、会話をする（保育士8年目）」という回答に象徴されるように、両極的な考え方に固執するよりも、目に見える工夫へと視野を広げていったということだろう。ランチルームに代表される「食事空間の確保」や、「テーブルクロス」「テーブル設定の工夫」などが上位にあがっていることも、具体的な環境づくりが進められていたことを裏付ける。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表11・12のようになる。

これを見ると、モデル園が27項目、一般園が20項目と、モデル園の方が食事の環境づくりについて、実践の幅が広いことがわかる。また、モデル園は「花を飾る」と「笑顔で会話・楽しい雰囲気」が1位と2位だが、一般園の方は「ＢＧＭ」と「静かで落ち着いた雰囲気」が1位と2位を占めている。前述した価値観で言えば、モデル園の方が比較的、賑わいだ食事空間を重視するのに対し、一般園は静寂な食事空間を重視する傾向が強いともいえる。モデル園として食育を進める中、「食事は楽しむものである」ことを自覚した成果といえるかもしれない。

さらに、モデル園では「ランチョンマット」「当番のしやすさ」「食事量の調整」「味・匂いの表現」など、少数意見ではあるが、一般園には見られない取り組みもあげていた。こうした試みも、食事環境そのものを幅広く、かつ子ども主体の立場から考え、実践していった結果であろう。

表10　食事環境づくりの実績

		回答内容	
		実数	%
1	笑顔で会話・楽しい雰囲気	28	10.8%
2	花を飾る	28	10.8%
3	静かで落ち着いた雰囲気	27	10.4%
4	BGM	24	9.2%
5	美化装飾	23	8.8%
6	食事空間の確保	17	6.5%
7	テーブルクロス	16	6.2%
8	テーブル設定の工夫	15	5.8%
9	意欲を引き出す言葉かけ	13	5.0%
10	大人も一緒に食べる	12	4.6%
11	食材紹介	10	3.8%
12	視聴覚教材の活用	7	2.7%
13	ランチョンマット	6	2.3%
14	食事道具の工夫	6	2.3%
15	盛りつけの工夫	3	1.2%
16	当番のしやすさ	3	1.2%
17	人数調整	3	1.2%
18	食事時間の工夫	3	1.2%
19	清潔さ・衛生管理	2	0.8%
20	食事量の調節	2	0.8%
21	異年齢交流	2	0.8%
22	戸外での食事	2	0.8%
23	食事前後の活動の充実	2	0.8%
24	献立の工夫	2	0.8%
25	食事形式の工夫・変化	1	0.4%
26	味・匂いの表現	1	0.4%
27	調理パフォーマンス	1	0.4%
28	職員連携	1	0.4%
		260	100.0%

表11　食事環境づくりの実績(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	花を飾る	27	12.7%
2	笑顔で会話・楽しい雰囲気	25	11.7%
3	静かで落ち着いた雰囲気	21	9.9%
4	美化装飾	19	8.9%
5	BGM	17	8.0%
6	食事空間の確保	15	7.0%
7	テーブルクロス	14	6.6%
8	意欲を引き出す言葉かけ	10	4.7%
9	テーブル設定の工夫	10	4.7%
10	食材紹介	9	4.2%
11	大人も一緒に食べる	8	3.8%
12	視聴覚教材の活用	6	2.8%
13	ランチョンマット	6	2.8%
14	食事道具の工夫	5	2.3%
15	当番のしやすさ	3	1.4%
16	食事量の調節	2	0.9%
17	清潔さ・衛生管理	2	0.9%
18	盛りつけの工夫	2	0.9%
19	人数調整	2	0.9%
20	食事前後の活動の充実	2	0.9%
21	食事時間の工夫	2	0.9%
22	味・匂いの表現	1	0.5%
23	食事形式の工夫・変化	1	0.5%
24	異年齢交流	1	0.5%
25	戸外での食事	1	0.5%
26	献立の工夫	1	0.5%
27	職員連携	1	0.5%
		213	100.0%

表12 食事環境づくりの実績(一般園)

		回答内容	
		実数	%
1	BGM	7	14.9%
2	静かで落ち着いた雰囲気	6	12.8%
3	テーブル設定の工夫	5	10.6%
4	美化装飾	4	8.5%
5	大人も一緒に食べる	4	8.5%
6	笑顔で会話・楽しい雰囲気	3	6.4%
7	意欲を引き出す言葉かけ	3	6.4%
8	食事空間の確保	2	4.3%
9	テーブルクロス	2	4.3%
10	花を飾る	1	2.1%
11	盛りつけの工夫	1	2.1%
12	食材紹介	1	2.1%
13	視聴覚教材の活用	1	2.1%
14	異年齢交流	1	2.1%
15	戸外での食事	1	2.1%
16	人数調整	1	2.1%
17	食事道具の工夫	1	2.1%
18	食事時間の工夫	1	2.1%
19	調理パフォーマンス	1	2.1%
20	献立の工夫	1	2.1%
		47	100.0%

2-4. 食事時間以外での実践の実績

「4. 今年度、食事時間以外で、子どもの食を充実させるために重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか?」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は24項目であった。この24項目に対して、249件の回答が得られた。その結果は、表13に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「媒体による栄養指導・食教育」の17.3%であった。次に「栽培活動」14.5%、「調理活動」10.0%、「遊びの充実」9.2%、「家庭への啓発・啓蒙」8.4%が続く。以上の5つの取り組みで全回答数の59.4%を占めた。

食育プログラムの開始時と同様、「媒体による栄養指導・食教育」が1位であり、栄養士が配置されていない園でも継続的に取り組んでいることがわかった。栄養士の有無にかかわらず、食事時間以外での取り組みも、まずは栄養・食品に関するアプローチを重視していこうとする傾向が根強いことが伺える。

しかし、食育プログラムの開始時には、中位だった「調理活動」が上位にあがっていることは注目すべき事柄である。前述した通り、「調理活動」は「栽培活動」とともに食育をイメージする際、最上位に位置づく取り組みである。しかし、実際には0157が社会問題化されて以降、実施したい気持ちはありつつも、諸般の事情で実際に取り組むことは敬遠されてきた。しかし、自覚的に食育に取り組もうとする中、困難さを乗り越え、「調理活動」を再開したわけである。これは、食育を栄養・食品中心のアプローチから脱皮させ、食の多様性にかかわる実践を生み出すきっかけになろう。

また、若干ではあるが、食育プログラムの開始時には見られなかった「喫食調査」「異年齢交流」「情緒の安定」といった取り組みも見られた。喫食調査は、食育の計画作成に不可欠な実態把握のひとつとして重要な取り組みである。

意外に取り組まれてこなかったものだが、食育の実施を機に広がっていくことを期待したい。さらに、「異年齢交流」「情緒の安定」は、人間関係の広がり、深まりを意図する中、同年齢だけでなく、年齢が異なる子どもや、保育者など大人との関係も重要であるとの認識に基づいた実践であったと思われる。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表 14・15 のようになる。

これを見ると、モデル園が 22 項目、一般園が 11 項目と、モデル園の方が食事時間外での取り組みについても、実践の幅が広いことがわかる。特に、モデル園では「絵画・製作活動」「自然とのふれあい」「伝統文化・年中行事の活用」といった保育内容の多様さに沿った展開が図られていた。さらに、「給食室との交流」「生産者・小売業への関心」というようにクラス、そして園を超えた場や人にアプローチしていく取り組みも見られた。

表13 食事時間以外での実践実績

		回答内容	
		実数	%
1	媒体による栄養指導・食教育	43	17.3%
2	栽培活動	36	14.5%
3	調理活動	25	10.0%
4	遊びの充実	23	9.2%
5	家庭への啓発・啓蒙	21	8.4%
6	体を使った遊び	18	7.2%
7	生活習慣・リズムの形成	15	6.0%
8	食材紹介	15	6.0%
9	手遊び・表現遊び	9	3.6%
10	給食室との交流	7	2.8%
11	絵画・製作活動	6	2.4%
12	自然とのふれあい	6	2.4%
13	生産者・小売業への関心	4	1.6%
14	職員連携	4	1.6%
15	食事準備へのかかわり	3	1.2%
16	伝統文化・年中行事の活用	3	1.2%
17	保健・健康指導	2	0.8%
18	喫食調査	2	0.8%
19	異年齢交流	2	0.8%
20	食に関する会話	1	0.4%
21	大人との信頼関係づくり	1	0.4%
22	食事マナー指導	1	0.4%
23	情緒の安定	1	0.4%
24	バイキング	1	0.4%
		249	100.0%

表14 食事時間以外での実践実績(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	媒体による栄養指導・食教育	30	15.2%
2	栽培活動	26	13.2%
3	遊びの充実	20	10.2%
4	調理活動	19	9.6%
5	体を使った遊び	15	7.6%
6	生活習慣・リズムの形成	14	7.1%
7	食材紹介	13	6.6%
8	家庭への啓発・啓蒙	12	6.1%
9	給食室との交流	7	3.6%
10	絵画・製作活動	6	3.0%
11	自然とのふれあい	6	3.0%
12	手遊び・表現遊び	6	3.0%
13	生産者・小売業への関心	4	2.0%
14	職員連携	4	2.0%
15	食事準備へのかかわり	3	1.5%
16	伝統文化・年中行事の活用	3	1.5%
17	保健・健康指導	2	1.0%
18	喫食調査	2	1.0%
19	異年齢交流	2	1.0%
20	食に関する会話	1	0.5%
21	大人との信頼関係づくり	1	0.5%
22	情緒の安定	1	0.5%
		197	100.0%

表15 食事時間以外での実践実績(一般園)

		回答内容	
		実数	%
1	媒体による栄養指導・食教育	13	25.0%
2	栽培活動	10	19.2%
3	家庭への啓発・啓蒙	9	17.3%
4	調理活動	6	11.5%
5	体を使った遊び	3	5.8%
6	遊びの充実	3	5.8%
7	手遊び・表現遊び	3	5.8%
8	食材紹介	2	3.8%
9	生活習慣・リズムの形成	1	1.9%
10	食事マナー指導	1	1.9%
11	バイキング	1	1.9%
		52	100.0%

2-5. 食育の計画に関する実績

「5. 今年度、食育を充実させるため、保育の計画づくりについて、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対し、カテゴリー化できた内容は 40 項目であった。この 40 項目に対して、203 件の回答が得られた。その結果は、表 16 に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「栽培活動」の 10.3%であった。次に「発達・年齢の考慮」9.9%、「調理保育」8.9%、「食への関心・媒体指導」8.9%、「職員連携」5.9%が続く。以上の５つの取り組みで全回答数の 41.4%を占めるにとどまった。それだけ、計画づくりに対して、多様な取り組みがなされてきたというこ

とだろう。ただ、回答内容には計画に掲げ、実践した内容に関するものと、計画書そのものを作成する際に工夫したことの２点が混在してもいる。いわば、計画の内容設定から作成方法までの問題が未整理のままであったことも、回答内容が多岐にわたった原因と考えられる。

こうした点を踏まえ、「計画づくり」つまり計画作成の方法や考え方について見てみると、前述した「発達・年齢考慮」「職員連携」に続き、「子どもの実態把握」3.9%、「目標の検討」3.4%、「年間計画の作成」2.5%、「指導計画の作成」2.5%、「保育の計画との一体化」1.5%、となっている。そして、「食育の幅を広く捉える」「季節変化の考慮」「記録の活用」「食育内容の検討」「計画様式の見直し」「評価の実施」がそれぞれ0.5%となっている。このうち、「目標の検討」「年間計画の作成」「指導計画の作成」「食育内容の検討」「計画様式の見直し」「評価の実施」は、食育プログラムの開始時には見られなかったものである。開始時に１位であった「保育の計画との一体化」は、計画作成の姿勢、あるいはコンセプトを述べたものだが、食育プログラムの実施後、それを具体化した結果が現れていると思われる。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表17･18のようになる。

これを見ると、モデル園が38項目、一般園が15項目と、モデル園の方が計画づくりにおいても、幅広い取り組みを行ってきたことがわかる。特に、モデル園では前述した食育プログラムの開始時には見られなかった「目標の検討」「年間計画の作成」「指導計画の作成」「食育内容の検討」「計画様式の見直し」「評価の実施」の全てについて取り組みが見られた。

表16 食育の計画づくりにかかわる実績

		回答内容	
		実数	%
1	栽培活動	21	10.3%
2	発達・年齢考慮	20	9.9%
3	調理保育	18	8.9%
4	食への関心・媒体指導	13	6.4%
5	職員連携	12	5.9%
6	食事マナー指導	9	4.4%
7	子どもの実態把握	8	3.9%
8	雰囲気・環境づくり	8	3.9%
9	生活習慣・リズムの形成	8	3.9%
10	目標の検討	7	3.4%
11	保護者への啓発・啓蒙	6	3.0%
12	ランチルーム設置	6	3.0%
13	食事準備へのかかわり	5	2.5%
14	自主性・意欲の形成	5	2.5%
15	年間計画の作成	5	2.5%
16	指導計画の作成	5	2.5%
17	遊びの充実	4	2.0%
18	栄養指導・食教育	4	2.0%
19	体を使った活動	4	2.0%
20	保育の計画との一体化	3	1.5%
21	食材紹介	3	1.5%
22	異年齢交流	3	1.5%
23	感謝・心の育ちを促す	3	1.5%
24	食文化・行事の充実	3	1.5%
25	バイキング給食	2	1.0%
26	言葉かけの具体化	2	1.0%
27	偏食指導	2	1.0%
28	地域交流	2	1.0%
29	食育を幅広く捉える	1	0.5%
30	給食室との交流	1	0.5%
31	大人が手本を示す	1	0.5%
32	一時保育の組み込み	1	0.5%
33	季節変化の考慮	1	0.5%
34	記録の活用	1	0.5%
35	食育内容の検討	1	0.5%
36	会食・人間関係づくり	1	0.5%
37	完食指導	1	0.5%
38	計画様式の見直し	1	0.5%
39	評価の実施	1	0.5%
40	手先の発達	1	0.5%
	合計	203	100.0%

表17 食育の計画づくりにかかわる実績(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	発達・年齢考慮	18	10.5%
2	栽培活動	15	8.7%
3	調理保育	12	7.0%
4	食への関心・媒体指導	12	7.0%
5	職員連携	9	5.2%
6	子どもの実態把握	8	4.7%
7	雰囲気・環境づくり	8	4.7%
8	食事マナー指導	8	4.7%
9	生活習慣・リズムの形成	8	4.7%
10	保護者への啓発・啓蒙	6	3.5%
11	ランチルーム設置	6	3.5%
12	目標の検討	6	3.5%
13	食事準備へのかかわり	5	2.9%
14	指導計画の作成	5	2.9%
15	遊びの充実	4	2.3%
16	自主性・意欲の形成	4	2.3%
17	保育の計画との一体化	3	1.7%
18	食材紹介	3	1.7%
19	異年齢交流	3	1.7%
20	食文化・行事の充実	3	1.7%
21	体を使った活動	3	1.7%
22	感謝・心の育ちを促す	2	1.2%
23	言葉かけの具体化	2	1.2%
24	年間計画の作成	2	1.2%
25	偏食指導	2	1.2%
26	栄養指導・食教育	2	1.2%
27	地域交流	2	1.2%
28	食育を幅広く捉える	1	0.6%
29	給食室との交流	1	0.6%
30	大人が手本を示す	1	0.6%
31	バイキング給食	1	0.6%
32	一時保育の組み込み	1	0.6%
33	季節変化の考慮	1	0.6%
34	記録の活用	1	0.6%
35	食育内容の検討	1	0.6%
36	会食・人間関係づくり	1	0.6%
37	計画様式の見直し	1	0.6%
38	評価の実施	1	0.6%
	合計	172	100.0%

表18 食育の計画づくりにかかわる実績(一般園)

		回答内容	
		実数	%
1	調理保育	6	19.4%
2	栽培活動	6	19.4%
3	職員連携	3	9.7%
4	年間計画の作成	3	9.7%
5	発達・年齢考慮	2	6.5%
6	栄養指導・食教育	2	6.5%
7	食への関心・媒体指導	1	3.2%
8	食事マナー指導	1	3.2%
9	バイキング給食	1	3.2%
10	自主性・意欲の形成	1	3.2%
11	感謝・心の育ちを促す	1	3.2%
12	目標の検討	1	3.2%
13	体を使った活動	1	3.2%
14	完食指導	1	3.2%
15	手先の発達	1	3.2%
	合計	31	100.0%

2-6. 食育の評価に関する実績

「6. 今年度、食育を充実させるため、保育の評価として、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は37項目であった。この37項目に対して、142件の回答が得られた。その結果は、表19に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「自主性・意欲の形成」の7.7%であった。次に、「文字記録の充実」と「食事のマナー指導」が7.0$、「ランチルームの設置」と「栽培活動」が6.3%で続く。以上の5つの取り組みで全回答数の34.3%を占めるにとどまった。それだけ、評価活動に対して、多様な取り組みがなされてきたということだろう。ただ、回答内容には計画づくりと同様、異なる視点のものが混在している。大別すると、子どもの育ちとして期待したい事柄、つまり目標に関することと、実践内容、そして評価方法の3点になろう。こうした問題が未整理のままであったことも、回答内容が多岐にわたった原因と考えられる。

こうした点を踏まえ、評価方法について見てみると、前述した「文字記録の充実」に続き、「園全体での話し合い」と「保護者の意見聴取」が4.9%、「ビデオ活用」と「クラスの反省」が4.2%、「計画・実践への活用」3.5%、「喫食調査」1.4%となっている。そして、「チェックリストの活用」「職員の意志統一」「園内プロジ

ェクトチームでの検討」がそれぞれ0.7%となっている。このうち、「クラスの反省」「喫食調査」「職員の意志統一」「園内プロジェクトチームでの検討」は、食育プログラムの開始時には見られなかったものである。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表20・21のようになる。これを見ると、モデル園が34項目、一般園が12項目と、モデル園の方が評価活動においても、幅広い取り組みを行ってきたことがわかる。特に、モデル園では前述した食育プログラムの開始時には見られなかった「クラスの反省」「喫食調査」「職員の意志統一」「園内プロジェクトチームでの検討」の全てについて取り組みが見られた。また、「他園見学」も実施しており、「保護者の意見聴取」と合わせると、食育を実践する当事者である保育者だけの視点ではなく、他園の保育との比較、あるいは保護者の声を踏まえ、多様な角度から評価活動を実施してきたことがわかる。

表19 食育の評価にかかわる実績

		回答内容	
		実数	%
1	自主性・意欲の形成	11	7.7%
2	文字記録の充実	10	7.0%
3	食事のマナー指導	10	7.0%
4	ランチルーム設置	9	6.3%
5	栽培活動	9	6.3%
6	園全体での話し合い	7	4.9%
7	保護者の意見聴取	7	4.9%
8	食環境の見直し	7	4.9%
9	ビデオ活用	6	4.2%
10	クラスの反省	6	4.2%
11	計画・実践への活用	5	3.5%
12	食への関心向上	5	3.5%
13	調理保育	5	3.5%
14	保育者の意識改革	4	2.8%
15	食事時間	4	2.8%
16	遊びの充実	3	2.1%
17	栄養指導の充実	3	2.1%
18	食習慣の形成	3	2.1%
19	試食会	3	2.1%
20	楽しい雰囲気	3	2.1%
21	人間関係づくり	3	2.1%
22	喫食調査	2	1.4%
23	生活リズムの定着	2	1.4%
24	献立の工夫	2	1.4%
25	チェックリストの活用	1	0.7%
26	給食室との交流	1	0.7%
27	生活全体の見直し	1	0.7%
28	職員の意志統一	1	0.7%
29	心の育ち	1	0.7%
30	園内プロジェクトチームでの検討	1	0.7%
31	保育者のかかわりの位置	1	0.7%
32	季節変化の考慮	1	0.7%
33	大人との信頼関係づくり	1	0.7%
34	活動の見直し	1	0.7%
35	指先の発達	1	0.7%
36	偏食指導	1	0.7%
37	他園見学	1	0.7%
	合計	142	100.0%

表20 食育の評価に関わる実績(モデル園)

		回答内容	
		実数	%
1	自主性・意欲の形成	11	8.8%
2	文字記録の充実	10	8.0%
3	食事のマナー指導	10	8.0%
4	ランチルーム設置	9	7.2%
5	栽培活動	8	6.4%
6	食環境の見直し	7	5.6%
7	園全体での話し合い	6	4.8%
8	保護者の意見聴取	6	4.8%
9	ビデオ活用	6	4.8%
10	クラスの反省	6	4.8%
11	食への関心向上	4	3.2%
12	食事時間	4	3.2%
13	遊びの充実	3	2.4%
14	保育者の意識改革	3	2.4%
15	食習慣の形成	3	2.4%
16	調理保育	3	2.4%
17	楽しい雰囲気	3	2.4%
18	人間関係づくり	3	2.4%
19	喫食調査	2	1.6%
20	生活リズムの定着	2	1.6%
21	試食会	2	1.6%
22	献立の工夫	2	1.6%
23	計画・実践への活用	1	0.8%
24	チェックリストの活用	1	0.8%
25	栄養指導の充実	1	0.8%
26	生活全体の見直し	1	0.8%
27	職員の意志統一	1	0.8%
28	心の育ち	1	0.8%
29	園内プロジェクトチームでの検討	1	0.8%
30	保育者のかかわりの位置	1	0.8%
31	大人との信頼関係づくり	1	0.8%
32	活動の見直し	1	0.8%
33	偏食指導	1	0.8%
34	他園見学	1	0.8%
	合計	125	100.0%